

# 湖山池周辺の生活史 —聞き取り調査ノート—

小林陽子\*

## How People Lived Around Lake Koyama in the Early Showa Period

KOBAYASHI Yoko

キーワード：湖山池，生活史，聞き取り調査，昭和期前半

Key Words : Lake Koyama, life history, oral survey, early Showa period

### 1. はじめに

鳥取県東部に位置する湖山池は，日本最大の池といわれる汽水湖である。全国的にも珍しい「石がま漁」が行われるなど，漁業や農業用水として利用され，地域住民の生活と深い関わりあいをもってきた。ところが，生活習慣の変化に伴う生活排水や農薬の使用により，池の水質汚濁は進行し，池に棲息する動植物の生態系は異変した。

湖山池の水質とその浄化に関しては，各方面から関心がもたれ，継起的に研究がなされてきた<sup>1)</sup>。また，湖山池の伝統漁業である「石がま漁」や<sup>2)</sup>，漁獲高の減少と漁業不振が続いている湖沼漁業の課題に関する報告<sup>3)</sup>，さらに湖山池周辺地域における「まちづくり」「地域づくり」といった視点からの取り組みも報告されている<sup>4)</sup>。このように，湖山池はさまざまな方面から研究され，その成果は蓄積されつつある。

ところで近年，地域に古くから伝わっている文化や生活を理解する作業が，各地域や学校で見直されている。今回の学習指導要領改訂の基本的な考え方にも，地域の人々の暮らしや郷土の伝統・文化を受けとめ，それを継承発展させるための教育を充実することが盛り込まれた<sup>5)</sup>。湖山池周辺地域に目を転ずると，「石がま漁」のような伝統文化は別として，庶民の日常に視座を向けた事柄は等閑に付されてきた。唯一，細井由彦氏は地域住民に対し「湖山池の近くで暮らして経験してこられたこと」を聞きとって，整理している<sup>6)</sup>。しかしながら細井氏は「これまでお話を伺う機会がなかった女性の方々にも範囲を広げて，さらに調査を増やし全体のとりまとめを行いたい」と自ら記すように<sup>7)</sup>，男性だけをその調査対象としているため，女性の視点からみた生活を検討していない。すなわち，日常的に繰り返される生活のなかで，多くの女性が担ってきた最も基本的かつ人間の深い歴史に根ざした活動，すなわち衣食住を中心とした活動や，これに関する先人の智慧に触れていないのである。

---

\* 鳥取大学地域学部地域教育学科

そこで本稿の目的は、湖山池周辺地域の人々の衣食住を中心とした活動を記録に残し、地域教材開発の一資料として資することにある<sup>8)</sup>。対象時期は、現時点で聞き取り調査が可能な方々の年齢から、昭和期前半とした。

## 2. 調査方法

湖山池周辺の各地区から、男性5名、女性9名、計14名から昭和期前半における湖山池周辺の生活について聞き取り調査を行った。図1に示した三津、福井、金沢、三山口、高住、湖山の6地域が調査地区である。聞き取りは原則として各家庭を訪問して行い、これが難しい場合は地域の公民

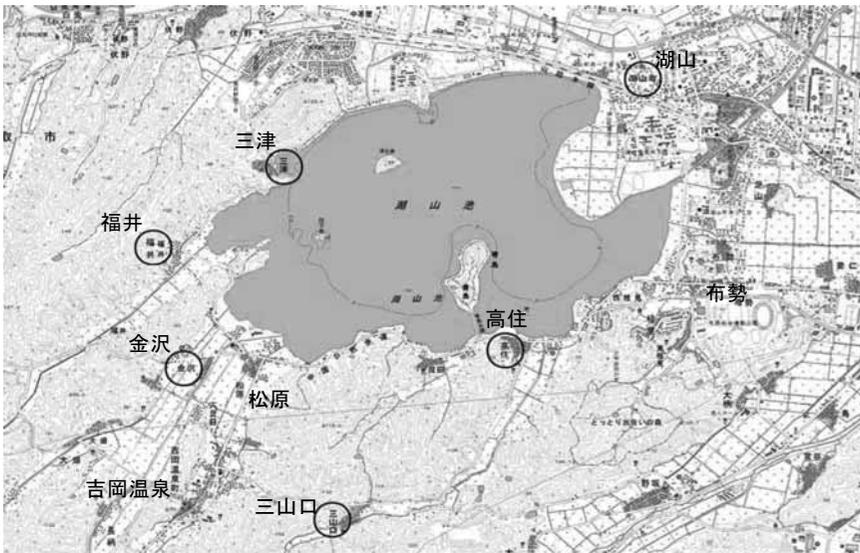


図1 調査地区

表1 調査方法

対象者 イニシャル [性別・生年月日・出身地区]	地区	調査年月	調査時間	調査場所
A S [男性・1928 (昭3) 生・三津] T Y [男性・1931 (昭6) 生・三津] T H [男性・1932 (昭7) 生・三津] T T [男性・1936 (昭11) 生・三津]	三津	2006年10月	2時間	三津生活改善センター
Y S [女性・1930 (昭5) 生・三山口]	三山口	2006年10月	3時間	Y S 自宅
N M [女性・1928 (昭3) 生・湖山]	湖山	2006年10月	2時間	湖山公民館
T K [女性・1913 (大2) 生・吉岡]	三津	2006年11月	2時間	T K 自宅
F K [女性・1922 (大正11) 生・八頭]	金沢	2006年11月	2時間	F K 自宅
N K [男性・1920 (大9) 生・高住]	高住	2006年11月	4時間	N K 自宅
F K [女性・1930 (昭5) 生・高住]	福井	2006年11月	4時間	F K 自宅
Y K [女性・1919 (大8) 生・岩美] Y R [女性・1920 (大9) 生・三山口] Y T [女性・1922 (大11) 生・松原]	三山口	2006年11月	4時間	Y R 自宅
M K [女性・1935 (昭10) 生・布施]	高住	2006年12月	2時間	J A 湖南支店

館等を利用した。14名の年齢は70歳から93歳で、平均80歳であった。

### 3. 結果

#### (1) 和装から洋装へ

- ①TK・女性・1913生：農作業のときは「もんぺ」、冬は「どんぶく」を着ていた。「地下足袋」に「脚絆」を巻いた。
- ②NK・男性・1920生：1927（昭和2）年の小学校（尋常小学校）入学時は、クラス全員が着物と袴を着用していたが、1933（昭和8）年の卒業時には、男子は学童服、女子は着物であった。履物は「草履」、冬は「ぶんごみ」を履いた。学校の先生と警察巡査が田舎に洋服を持ち込んだ。
- ③YR・女性・1920生：小学校（尋常）、高等小学校とも着物と袴を着て通学した。高等小学校卒業後、鳥取県立八頭高等女学校（以下八頭高女と略称）へ入学した。八頭高女で2年生から3年生に進級するときに制服ができ、これを着て通学するようになった。
- ④NM・女性・1928生：子どもの頃はセーラー服を着ていた。男女とも「筒っぼう」、冬は「どんぶく」を着た。
- ⑤FK・女性・1930生：農作業のときは「みの」や「鹿野傘」をかぶって畑仕事をした。「みの」は乾いているときは軽くて良いけれども、雨などでぬれるととても重くなった。「みの」の代わりに「田植えごぞ」も使用した。  
農作業以外の防寒具は、女性は「マント」、男性は「とんび」を着用した。  
子どもの頃は「べったん靴」を買って履いたものだ。
- ⑥YS・女性・1930生：防寒具は「マント」や「ケット」を着た。保管は「柳ごうり」に入れた。ここに入れておくと衣類が乾燥した。
- ⑦MK・女性・1935生：小学校（国民学校）の頃は、着物を着ていた。

農作業は「みの」や「鹿野傘」をかぶり、「もんぺ」などを履いて行っていた。「どんぶく」とは綿が入った半てんのこと、「ぶんごみ」はわら製の長靴である。

児童の通学服が和装から洋装に変化するの、1935（昭和10）年前後であった。比較的卒業写真が充実し、湖山池周辺地域に近接している鳥取市立賀露小学校『賀露校創立百周年記念誌』から、



写真1 鹿野傘

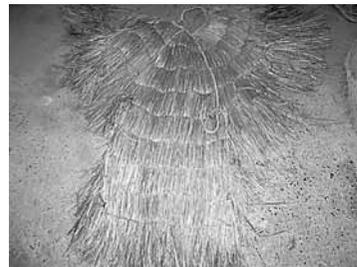


写真2 みの

(いずれも三山口・柳田利都子さん蔵)

表2 賀露小学校における洋装化の推移

性別 \ 年	T13	T14	T15	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18
男子(%)	0		0	0	16.2	0	50.1	—	94.9	90	90.9	92.9	—	—	—	—	100	100	100	100
女子(%)	0	0	0	0	0	0	0	—	0	14.5	24.4	38.6	50	84.8	—	100	100	100	100	100

(賀露校創立百周年記念誌発行委員会編刊『賀露校創立百周年記念誌』1973年より著者作成)

洋装化の割合を男女それぞれに示したのが表2である。②NKが述べるように、子どもの洋装は、男児の方が早くから取り入れられたことがわかる。東京近郊の小学校では、1923(大正12)年の関東大震災後、児童の洋装化が急速に進展し、昭和10年代にほぼ100パーセントになったといわれている<sup>9)</sup>。卒業写真という儀礼上のもものという制約はあるものの、湖山池周辺にも児童の洋装化が進展、定着したことが確認できる。

児童の洋装と同様に、学生生徒の洋装制服の導入、定着は、女子より男子のほうがかなり早い。男子の洋装制服が1890年代に積極的に採用されたのに比して、女子のそれは和装制服、改良服などの紆余曲折を経て、1920年から30年代に普及をみせたといわれている<sup>10)</sup>。④NMの卒業した鳥取県立鳥取高等女学校(以下県立鳥取高女と略称)では、全国的にみても決して遅くはない大正11(1922)年から洋装制服が始まった<sup>11)</sup>。

④NMが鳥取高女に入学した1941(昭和16)年に、文部省は中等程度諸学校共通の制服を制定した。最初の全国規模での学校制服の制定であった。これを着用した④NMは、制服の思い出について以下のように記している<sup>12)</sup>。

へちま衿の上着にベルトをしめ、もんぺをはいて、グループで写真屋さんで写したのが私たち昭和20年卒業の記念写真です。左袖には報国隊のマーク、胸には校章、名札、体力章をつけています。これが、私たちの女学校時代の制服です。

私たちが入学したのは、昭和16年4月、入学した時許されたスカートの白線も1か月余りで取り去られ、全国共通のへちま衿の新制々服を着用することになりました。

私たちの制服は、生地も純毛、混紡等いろいろで、仕立ても、4年生の手製、洋服屋の仕立て等で、へちま衿の形も洋服屋によって変わっていました。衣服材料が不足していた時代ですので、私たちは、この一着の制服をそれはそれは大切に着ました。白い替衿を洗ってアイロンをかけてはせっせと取り替えていたのがなつかしく思い出されます。

全国画一制服は、ナチ・ドイツの処女団が着用していた服にヒントを得たものといわれている。こうした制服の採用は、青少年への強力な意識を統合させる手段とともに、衣料資材欠乏による資材調達の合理化政策をも意味していた<sup>13)</sup>。④NMが「それはそれは大切」に着たことから、統制下の物資欠乏が湖山池周辺地域にも確実に訪れたことを示している。

## (2) 食生活

①TK・女性・1913生：子どもの頃は麦飯を食べていた(吉岡出身)。

三津に嫁いで池の魚を食べるようになった。2軒で行う引き網で獲れた魚は、主に青谷・浜村・鹿野へ売りに歩いた。売りに行くのは女の仕事だった。エビ(ヌカエビ)・

- フナ・アマサギ・シラウオなどを売った。寒に入ってから（1月の中頃から）、石がま漁でフナを獲った。庭にある生け簀にフナを入れ、冬の間、少しずつ食べた。夏に獲れたヌカエビは、大きな壺で塩辛にして、1年中食べた。
- ②NK・男性・1920生：くず米に麦を入れたものだった。囲炉裏で焼いて「おやき」にして食べもした。おかずは「菜っ葉」で、魚は盆と正月ぐらいしか食べることができなかった。魚は湖山池で釣れたものや賀露から行商が売りに来たものを買うか、または物々交換などをした。
- 小学生の時の弁当は「日の丸弁当（たくわんつき）」だった。  
調味料は味噌から醤油まですべて自家製であった。砂糖は貴重品だった。
- ③YK・女性・1919生：主食は米に麦を入れたものだった。盆や正月に白飯を食べることができた。おかずは野菜や魚だった。ヌカエビの塩辛やフナ・コイ・セイボ（セイゴ）・イナなどを食べた。イナは池から三山口の畑まで上がってきた。池で獲った魚は、自宅で食べるよりも売りに行くほうが多かった。主に吉岡や町に売りに出かけた。池ではウナギも獲れた。ウナギはお金になったので、ウナギのエサになるミミズを女の人たちが捕った。ナマズも獲れた。商人がたまにヌカエビなどを売りに来ていた。
- ④FK・女性・1922生：八頭から金沢に嫁いで来た。嫁ぐ以前は、コイやフナなどを食べたことがなかった。八頭から来て一番驚いたことは、魚をよく食べることだった。フグなども食べた。酒津から行商がよく来た。味噌や醤油は自家製であった。
- ⑤NM・女性・1928生：肉のご馳走でめったに食べることができなかった。たいいご飯にみそ汁と漬物、またはおひたしの一汁一菜だった。  
戦時中は1日1人2合の米が配給された。3人家族で6合だったので、夜は雑炊にした。  
子どもの頃は湖山池で泳ぐことができたので、しじみを獲った。
- ⑥YS・女性・1930生：寒ブナ、コイ（刺身）、ヌカエビ、イナボ、カニ、シラウオ、ヒシなどを食べた。昔は護岸工事がされてなく、石が積んであった。その隙間にカニが住んでいて、ミミズをエサにカニをおびき出しては捕まえた。エビも同様で、ヌカを撒いておびき寄せて、網ですくって捕まえた。
- ⑦FK・女性・1930生：2人組みの引き網で獲れた小さな魚を食べた。エビ・ゴズ（5センチくらいの小さな魚）・ドジョウなど生醤油と砂糖で煮たりして食べた。魚を鹿野や吉岡方面に売りに行ったり、物々交換したりした。自宅にたわわに実った柿があるのに、柿と交換してしまったこともあった。かんこ船に乗って、ヒシを採った。大がまで炊いて町に持って行って売った。子どもは貝を捕ったりした。  
肉は食べなかったけれども、兎は捕って食べた。  
味噌や醤油はすべて自家製だった。酒まで造って警察が家にやって来たこともある。
- ⑧MK・女性・1935生：湖山池は護岸ではなく石が重ねてあったので、その隙間からエビがでてきた。これをよく捕って、てんぷらなどにして食べた。  
布勢で暮らしていた子どもの頃は、湖山からヌカエビやイナボを売りに来ていた。小学生のときは池でよく泳ぎ、しじみ、タチカイ、マツカイなどを捕って料理してもらった。

湖山池周辺の食生活は比較的恵まれていた。たとえば吉岡から三津に嫁いだ①TKは、「ここは漁があるし、百姓があるしな。何にもできるところで、そいで山家(吉岡)からええとこだっちゅって(嫁に行くよう勧められた)」と言う。また、⑧MKは、1956(昭和31)年に、布勢から高住に嫁に行くことを両親に強く勧められた。その理由は、高住という土地が湖山池に隣接しているからであった。

池と田畑に囲まれた地形環境を利用して、湖山池周辺の人々の食生活は魚・野菜・米を中心としていた。特に三津や福井では、漁で獲れた魚を鹿野・吉岡・青谷・旧鳥取市内に売りに行き、物々交換のときもあったけれども、現金収入を得、売り物にならないような小さな魚を自分たちで食べていた。もちろんすべての地区で漁業ができるわけではない。けれども、八頭から金沢に嫁いだ④FKが「八頭から来て一番驚いたことは、魚をよく食べることだった」と言うように、山地出身者にとって、湖山池周辺は魚を頻繁に食べることができる地域だったのである。

内務省衛生局が1929(昭和4)年に発表した「農村保健衛生実地調査成績」には、農村食生活の実態が報告されている。それによると、農村ではエネルギー源の大半を米麦混合または米のみの主食に頼り、副食物の種類・質・量はきわめて乏しく、とりわけ動物性たんぱく質や脂肪の摂取量が低いという<sup>14)</sup>。これに対して、湖山池周辺では、池の魚介類を食べるため、動物性たんぱく質の摂取量は相対的に低くはなかったのではないかと推測される。以下にどのような食生活をしていたのか具体的にみていきたい。

### 1) 魚

聞き取り調査によると、湖山池でよく獲れた魚はエビ(ヌカエビ)、フナ、コイ、アマサギ、シラウオ、セイゴ(セイボ)、イナ、ウナギ、ナマズ、イナボ、カニ、ゴズ、ドジョウなどで、貝はシジミ、タチカイなどであった。

梅雨近くになるとエビ(ヌカエビ)がよく獲れた。エビは湖山エビといわれる5センチから6センチくらいのもので、塩茹でや下味を少しつけて煮て食べた。ヌカエビは塩辛にしたり、山椒の芽を入れて甘辛く炊いたりして食べたようだ。この佃煮を「湖山煮」と呼び、以前は店で販売されていた。

フナのうち、石がま漁で獲れる寒ブナは非常に美味という。フナを刺身にするのは男の仕事であった。田植え時期になると、湖山池のフナが産卵のために三山口あたりの田んぼまで上って来て、手づかみで獲れた。

コイは湖山池で養殖されていた時期がある。養鯉家は悪天候が続き、漁に出ることができない冬季をねらって出荷していた。ところが1927(昭和2)年の正月は、好天気が続き鮮魚の漁獲量が増え、通常100匁(375グラム)で40銭ほどだったコイが、27~8銭まで値が下がる大打撃を受けたこともあったという<sup>15)</sup>。

アマサギはワカサギのことである。冬になるとアマサギのエサである「ウンカ(浮塵子)」が湖山池の周りを飛んだ。「ウンカ」が一面に飛び交う年はアマサギがよく獲れた。

シラウオは海から池に遡上するので、すくってそのまま食べることができた。初夏にセイゴやイナは川に遡上するので河口に集まった。セイゴはスズキの子で、セイゴーコバネースズキと成長の段階によって名が変わる出生魚である。イナはボラの幼魚で、3年以上たつとボラと呼ばれる。イナ



写真3 かんこ船  
(湖山池自然再生協議会蔵)

やボラはかき揚げにしたり、ネギを入れて醤油で炊いて食べた。三山口では良田方面から行商が天秤を担いで「今日イナボラだで」と売りに来た。

ウナギは高い値段で売れた。これを獲るのは男の仕事で、エサとなるミミズを捕るのは女の仕事であった。

この他に、福井ではヒシをよく採った。「かんこ船」という小型の漁船に腹ばいに乗って採った。塩茹でにして、ヒシのトゲが唇に刺さって痛い思いをしながら食したという。筆者も食してみたが、水分の多いクリのような味がした。

## 2) 野菜

野菜は作れるものであればなんでも作ったという。昭和10年代の湖山では、主にナス、トマト、ダイコン、ゴボウなどを作っていたようだ。

## 3) 米

主食は当然米であった。稲を刈ったあとに麦を撒き、この麦を押し麦にして、米に混ぜて食べた。麦は牛のエサにもなった。盆や正月でないと、白飯を食べることはできなかった。米の飯を食べることができた人は、地主や中以上の下作であり、多くの人はず米に麦を混ぜて食べていたという。

②NKが鳥取師範学校に入学した1940（昭和15）年頃、授業料は5円50銭、米俵1俵（60キログラム）は5円であった。この年の新卒訓導の初任給は、物価高騰のため引き上げられ、男性の訓導48円、女性の訓導42円であった<sup>16)</sup>。また、昭和30年代に、⑧MKは高住と青島を往復する船を賀露で造船した。そのときの料金が米俵1俵半（90キログラム）を10年分であった。米の価値が高かったことをうかがわせる話である。

## 4) 調味料

すべての家庭で、醤油や味噌は自家製であった。味噌は大豆と麴を土臼でつき、塩を混ぜて作った。できたものは近所で交換しあったという。警察の目を盗んで酒までも密造したという。

## 5) 兎の肉

⑦FKによると、兎を捕って食べたという。昭和のはじめ頃、鳥取では毎年1万5～6千頭ほどの兎が狩猟されていし、八百屋の店先でも吊られて販売されていたというから、湖山池周辺だけではなく、鳥取県民の大切な食糧であったようだ<sup>17)</sup>。1930（昭和5）年には、「因幡養兎協会」が設立されている<sup>18)</sup>。ちなみに兎の肉はピンク色で柔らかく、どんな料理にも向くとのことだ。

## 6) おやつ

現代でもおやつは子どもにとっての楽しみであるように、昭和前半期の子どもたちにとっても同様であった。主にカキモチ、ヒシ、ヤキモン、イリマメ、キャンディーや駄菓子を食べていた。

カキモチは冬の楽しみで囲炉裏の火で焼いて食べた。三山口では吉岡温泉にやって来た浄瑠璃しばいの「でこ」を、カキモチを食べながら見ることが楽しみであったという。ヒシは上述したように、福井でよく採れた。三津でも福井ほどではないが、採って食べた。他の地域では、行商が持って来たものを購入したようだ。いずれも塩茹でにして食べた。ヤキモンとは、くず米を粉にしてもちのようについたもので、よもぎを入れたりした。キャンディーとはアイスキャンディーのことである。自転車で旗を立てて売りに来たものを買って食べた。湖山には富本さんという文房具と駄菓子を売る店があり、1銭であめ玉3つ買うことができた。

### (3) すまいと労働

- ① Y R ・女性・1920生：土間にむしろを敷いて、あしなか(草履)や百姓で使う道具を作った。竹細工もした。
- ② Y T ・女性・1922生：百姓をしながら夜池に出た。夜のほうが魚は獲れた。
- ③ F K ・女性・1930生：稲を刈ってから、田を牛ですいて麦を撒いた。牛がいないと田ができなかったので、一家に一頭必ずいた。毎朝、牛に食べさせる草刈をした。両手いっぱい4束も刈った。
- ④ M K ・女性・1935生：青島に畑があったので、船で通った。牛も乗せて行った。船で通う途中に洗たくを池でしながら行った。蚕を飼っていたので、蚕のエサとなる桑を青島に植えていた。

湖山池周辺は、田畑あり、池あり、と自然に恵まれ、比較的食生活に困らなかった一方、このおかげで1年中仕事がたくさんあったようだ。1913年生まれの三津に住むT Kは以下のように言う。

蚕飼いよりました。エサになる桑畑はひとつやふたつじゃねえ。この先にある、今はあの一、国立療養所が建つとるまわりの、あの、まわりの桑畑があつてなあ。ようけなんだって、そがいて桑採って、葉っぱ採って。蚕がすむと、秋になって稲して、そがいて今後稲がやっとなんしたら、引き網ってたって、池の魚獲って。とつてもせわしいところでした。石がまもあつた。引き網つてようさん男は出てつて、魚をアマサギとシラウオとフナウオとより分けて、選別して、それで2時や3時になってからだろうか、それを売りにでてなあ。

春から秋にかけて田畑仕事や養蚕をし、冬には石がま漁とその行商と1年中働きっぱなしの様子がかがえよう。それだけではない。日常の家事や針仕事、また機織や農具の製作などの仕事もあった。



写真4 湖山校養蚕実習場



写真5 湖山校養蚕実習場

(湖山公民館蔵、いずれも昭和10年代後半)

#### 1) 衣類管理

衣類管理は大きな負担であった。

夏には着物やどんぶく、布団などをすべてほどいて洗いなおし、のりをつけて干し、また縫いなおした。日々の繕い物もある。女性にとって、針仕事に代表される衣類管理は大きな負担であったし、これができないと生活することができなかった。したがって、初等教育から中等教育にいたるまで、裁縫は大きな授業時間数を占めていた。洋服が普及しても、全国的に裁縫は女性のたしなみとされ、裁縫や繕いものは家事の重要な部分を占めた。

洗たくは井戸水や湖山池でした。青島に畑を持っていた④MKは、洗たくをしながら船で移動したと言っていた。たとえ井戸水があったとしても、池の端に住んでいる人々は、おしめなどの汚れ物は池で洗ったようだ。こちら側でおしめを洗っていると、その正面では野菜を洗っている、という今では考えられない風景があちらこちらに見られたそうだ。当然、冬になると池の水は冷たく、洗面器いっぱいにお湯を持って行き、手を温めながら衣類を洗った。昭和初期は洗たくの合理化に目が向けられ、1930（昭和5）年には国産第1号の電気洗濯機が東京電気（現・東芝）から発売された。しかし一般に普及するのは、1955（昭和30）年以降のことで、それまで洗たくという重労働から解放されることはなかった。TKは「ほんとにえらい目しとりましたけなあ」と言った。

2) 風呂

風呂は井戸水を汲んで、五右衛門がまで沸かした。毎日風呂の準備をするのは大変な労働であったため、近所で順番に風呂を焚いた。10人も20人も同じ湯に入り、きれいな湯ではなかった。湖山池の水を汲んで、風呂に使用している人もいた。

3) 食事

食事の準備はかまどで行った。

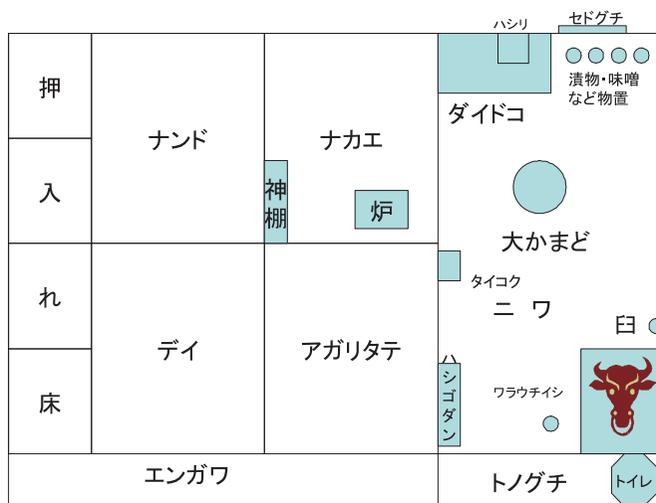


図2 高住の農家のすまい  
(調査より著者作成)

図2は高住の農家の間取り図である。向かって右側の「ニワ」と呼ばれる土間部分は、他の部屋より一段低い。「ダイドコ（台所）」や「大かまど」、「白」、「わら打ち石」、そして牛舎がある。「ダイドコ」にある「ハシリ」とは洗い場設備の「ナガシ」のことである。中国・近畿地方では「ナガシ」のことを「ハシリ」と呼ぶ農家が多いという。ここでは食事の準備だけではなく、味噌樽などの食品を貯蔵したり、農作業や牛の飼育などを行ったりと、多くの機能を有していた。牛は家族の一員として「ニワ」にいた。

家の中央に位置する「ナカエ」は、昼の生活のための「ヒロマ」「ナカマ」「ナカエ」「ジョウイ」などと呼ばれる床上空間である。ここには炉がある。全国的に炉が台所にある農家は約半数で、他は台所に隣接する部屋や出入口に近い表の部屋にある場合が多い。この高住の農家は後者に属す

ることになる。

作業の合間にとる食事は「アガリタテ」と呼ばれた部屋でとった。「ダイドコ」とははっきり区別させて食事を楽しむためではなく、作業をしたまま「アガリタテ」に腰をかけ、簡単に食事をとるためである。

「デイ」は「出居」と書く。「ザシキ」とも呼ばれ大事なお客を迎えるところであった。「ナンド」は「ヘヤ」,「チョウダイ」などとも呼ばれ、この家の主人夫婦の寝室である。どのような建て方であっても、日本の家には「ナンド」だけは必ずあるという。トイレは玄関の入り口にある「トノグチ」である。土足で用が足せるようになっていた。

#### 4) 農具の製作

土間でわら仕事をした。草履やわらじ、みのや鹿野傘、なわ、こも、むしろなどをわらで作った。

現在のように8時間労働で仕事が片づくわけではない。朝から晩まで、ときには夜なべをして1年中働いた。妊娠しても出産の直前まで畑や田んぼで働いていたという。



写真6



写真7

(いずれも三山口・柳田利都子さん蔵)

#### (4) 冠婚葬祭

最後に湖山池周辺の冠婚葬祭についてみていきたい。

##### 1) 婚姻・出産

- ① Y T ・女性・1919生：岩美から三山口に嫁に来た。1941（昭和16）年か1942（昭和17）年頃に伊勢で神前結婚をした。
- ② N K ・男性・1920生：結婚式は家でした。
- ③ Y R ・女性・1920生：1943（昭和18）年に婿をもらった。吉岡から髪結いに来てもらい、家に村の人や処女会を招いて3日間はお祝いをした。
- ④ Y T ・女性・1922生：1944（昭和19）年にオート三輪で、松原から三山口に嫁に来た。終戦の前の年であったので、日本髪にも結えなかった。戦時中ということもあって、特になにもしなかった。
- ⑤ F K ・女性・1922生：1945（昭和20）年に八頭から車に乗って金沢に嫁に来た。鳥取市内で式を挙げ、家で祝った。
- ⑥ F K ・女性・1930生：近所の人と結婚したので、22歳のときに歩いて嫁に来た。吉岡から髪結い呼んで鳥田に結ってもらった。これをほどくのが大変で、吉岡温泉まで行って髪の毛を洗った。着物は黒いすそ模様のものを着た。下駄は「ぶっくり」というつま先に毛がついて、表にたたみがはってあるものを履いた。じゃめ傘を仲人さんがさし、夕暮れだった

のでちょうちんをとぼしながら歩いた。親戚中で一の膳、二の膳のある料理を食べた。料理の中身は覚えていない。翌日にまた結婚式の衣装を着てお宮に挨拶に行けば、結婚の行事は終了した。

結婚相手についてNRは、自分の結婚相手を「捕虜収容所から帰ってきたら、親が決めていた」と言った。このように、ほとんどの人が親同士や仲人が決めた相手と結婚をした。当たり前のことであった<sup>19)</sup>。

式は多様である。湖山池周辺といっても、福井では2日で終了する結婚の行事が三山口では3日間祝うなど、それぞれの地区や家庭で結婚式のやり方に違いがみられた。

嫁入り道具は、たらい（大・中・小）、布団、たんす、ながもち、はさみ箱、下駄箱、鏡台、衣類、じゃのめ傘、などが挙げられた。大きなたらいは、子どもを産んだときに湯を沸かして赤ん坊を洗うためのものである。残りの中・小ふたつのたらいは、洗たくなどに使用した。これだけの嫁入り道具を準備するために、ある親は所持していた山のひとつを売ったという話も聞いた。

出産は自宅でし、湖山池南側の三津、福井、金沢、三山口方面では吉岡の産婆か福井の「龍福寺の奥さん」に子どもをとりあげてもらっていたことがわかった。「龍福寺の奥さん」は、産婆以外に「ちょっとした病気」も診ることができたという。

## 2) 葬式

- ①TK・女性・1913生：1977（昭和52）年まで土葬だった。美萩野にぬける共同墓地に埋葬した。
- ②YK・女性・1919生：1972（昭和47）年頃まで土葬だった。部落葬で、料理は亡くなった方の家ではなく、「ヤド（他の人の家）」でした。青年が亡くなったときだけ「マンドウ」を灯した。「マンドウ」は家からお墓までの道しるべとして竹の鼻先にろうそくを立てた（YR・女性・1920生、YT・女性・1922生も同様）。
- ③FK・女性・1922生：土葬だった。以前は葬式は家で行っていたので、地区の班で助け合いながら昼食も夕食も作った。とても大変な仕事だったので、いつからか弁当に変わった。15歳から60歳までの方が亡くなったら「マンドウ」を灯した。家の玄関からお墓の周りまで108本立てた。「マンドウ」を灯す竹細工作りが大変だった。今はしない。
- ④YS・女性・1930生：昭和50年頃まで土葬だった。
- ⑤FK・女性・1930生：部落葬で土葬だった。土葬は土を掘るのでたくさんの人手が必要だった。現在は火葬で香典は2000円と決められている。若い人が亡くなったときに「マンドウ」を家から墓まで灯した。赤いおこわのかわりにパンを配ったりした。

湖山池周辺では、昭和50年代まで土葬が行われていた。「マンドウ」とは「万灯」と書き、たいまつのようなものである。地域によって「マンドウ」をともし死者の年齢が異なるようだ。金沢では15から60歳としていたが、どの年齢の方が死亡しても「マンドウ」を灯す習慣の地域もあった。現在では業者が火葬し、すべて簡略化している。

## 3) 正月

- ①YK・女性・1919生：正月の買い物は男の仕事で、吉岡に注文したり、町に買いに行ったりした。ごちそうはマスやボウダラだった。餅は29日を避けて暮れについた。
- ②FK・女性・1922生：餅を1升ついた。いつも25日以降だったと思う。近所の人が手伝いに来た。おせち料理は普通にお豆やきんとん、おにしめ、昆布巻きなどを作った。たいして驚いたわけ

ではないけれども、生まれた土地の八頭は雑煮が味噌仕立てだったので、ここは小豆だった。

- ③F K・女性・1930生：餅は杵でついた。今は機械です。若水くみなどすべて舅が行ったので、女は正月の3日間は楽だった、ところが姑がなくなって夫の代になったとたん、夫はそのようなことを一切しなかったので大変だった。

どこでも正月は餅をついた。29日に餅をつく「苦もち」といって縁起が悪いことから、この日につくのは避けられた。『因幡の料理歳時記』によれば、普通農家では3から4軒が組みになって共同で餅をついた。これを「寄り合いづき」と言ったらしい。②F Kの住む金沢でも、この「寄り合いづき」が行われていたことがうかがえる。

①Y Kによれば、正月のポウダラはごちそうだったそうだ。ポウダラとは、保存食としてカチカチに干された鱈を10日ほどかけて水にもどし、甘辛く煮たものである。

②F Kの生家のある八頭では、雑煮は味噌仕立てだったようだが、鳥取では湖山池周辺に限らず、甘い小豆雑煮が一般的であったようである。吉田正は「古来、五穀の中でも米と小豆は格別扱いで、神への供えものとされてきた。また貧しい庶民には『甘味』へのあこがれが強かった」ことを小豆雑煮の由来としている<sup>20)</sup>。

①Y Kや③F Kがいうように、行事の担い手は男性であった。三山口のある家では、正月の飾り付けなどの準備はすべて男性がし、女性が入れない部屋までであったという。②F Kの家では日常でも料理のことは姑ではなく舅が詳しく、「いろいろおじいさんから教わった」と述べた。しかし「夫はそのようなことを一切しない」や「大変な仕事だったので、いつから弁当に」の言辭が示すように、行事の担い手の男性から女性へのシフト、または行事の簡素化が進んだことがわかる。

#### 4) 節分や祭り

- ①Y R・女性・1920生：ヒイラギとイワシの頭を串にさしたものを出入り口や玄関の両脇、土間、窓に飾った（Y K・女性・1919生、Y T・女性・1922生も同様）。
- ②F K・女性・1930生：節分は子どもの頃、ヒイラギとイワシでした。

毎年4月9日に春のお祭りが行われた。親戚中の人に来て、料理をたくさん作った。女の人はその準備で大変だった。はんぺん・ちくわ・赤いはんぺんなどめったに食べることのできないものが、この日に食べることができた。これらは商人が売りに来るか、もしくは注文した。主な料理は、わらび、ぜんまい、ふき、赤はた、うずら豆、黒豆、巻き寿司（のり・かんぴょう・高野）、さといも、ごぼう、きゃらふきなどだった。

節分には、ヒイラギの葉と干しイワシの頭を串に刺した「やいかがし」といわれるものを戸口や窓に突き刺して魔よけにした。この行事は現在でも比較的行われているようである。

まつりは春と収穫を祝う秋にもあった。このとき食べるごちそうは、旬のものを利用していることがわかる。準備にひと苦労したけれども、年に1回の楽しい行事であったことがうかがえる。

#### 4. おわりに

本稿は、昭和前半期における湖山池周辺の生活について、聞き取り調査をもとに述べてきた。調

査は十分とはいえず、これからの継続が必要である。最後に宮本常一の語録で結びとしたい<sup>21)</sup>。

今の私たちの生活や習慣や、村や町、そのほかあらゆるものが、どうして今のようになって来たかということは、私のいちばん知りたいことの一つです。そして世の中が今のようなありさまになるまでには、ずいぶんたくさんの人の、目に見えない努力がたまれているのではないのでしょうか。その目に見えない努力が少しでも知りたいのです。

## 注

- 1) たとえば、中野恵文・宮川正美・熊埜御堂洋「湖山池の水質に関する研究(1)」『鳥取大学教育学部研究報告 自然科学』23巻2号, 1972年, 179~189頁, 田中善蔵・島崎綾子・高田秀夫・松本聡「湖山池の水質について」『鳥取大学教養部紀要』18号, 1984年, 49~66頁, 道上正規・檜谷治・朴啓次「湖山池における栄養負荷量に関する研究」『鳥取大学工学部研究報告』23巻1号, 1992年, 99~108頁など多数。
- 2) 田中善蔵「湖山池の石がま漁について」『鳥取大学教養部紀要』16号, 1982年, 7~36頁, 「石がま漁の経済性についての一考察」『鳥取大学教養部紀要』21号, 1987年, 259~319頁。
- 3) 七條喜一郎・田中善蔵・佐藤俊夫・佐竹寛昭・竹内崇・原田悦守・鈴木實「内水面漁業の現状と課題一特に鳥取県湖山池漁業を事例として」『鳥取大学農学研究報告』49号, 1996年, 133~139頁, 七條喜一郎・佐藤俊夫・竹内崇・原田悦守・鈴木實「内水面漁業の活性化方策—鳥取県湖山池漁業のアンケート分析を通して」『鳥取大学農学研究報告』50号, 1997年, 83~89頁。
- 4) 増田貴則・細井由彦・津村友子・相良拓男・芝崎浩一「鳥取市における公園の利用実態からみた湖山池公園の現状」『鳥取大学工学部研究報告』32号, 2001年, 95~104頁, 若田泰徳・岩井かおり・霜田稔「湖山池周辺地域における地域連携の実践的事例報告」『鳥取大学教育地域科学部紀要 地域研究』5巻1号, 2003年, 175~182頁。
- 5) 文部科学省HP (<http://www.mext.go.jp/>)。新学習指導要領に示された「伝統と文化の継承」は、「道徳」の強化と関連しよう。今後、「伝統」の学習内容について検討する必要がある。
- 6) 細井由彦『湖山池の人々』私家版, 2007年。
- 7) 細井由彦『湖山池の人々—鳥取大学閉鎖性水域研究プロジェクト中間報告』2006年, 1頁。
- 8) 湖山池の地域教材開発への取り組みは, 鳥取県教育研修センターによって, 理科・社会・国語・図画工作の4教科で試みら報告されている(鳥取県教育研修センター編『鳥取県野外学習指導テキスト(1)』1981年)。また, 若田等は湖山池地域の総合学習支援として, 「子どもたちのための湖山池地域学習入門講座」を開設した。ここではおもに環境教育がテーマである(若田泰徳・岩井かおり・霜田稔「湖山池周辺地域における地域連携の実践的事例報告」『鳥取大学教育地域科学部紀要 地域研究』5巻1号, 2003年, 175~182頁)。
- 9) 小池三枝・柴田美恵『日本生活文化史』光生館, 2002年, 128頁。
- 10) 佐藤秀夫「学校における制服の成立史」『日本の教育史学』19集, 1976年, 4~24頁, 『日本の教育課題2 服装・頭髮と学校』1996年, 東京法令出版, 桑田直子「1920-30年代高等女学校における洋装制服の普及過程—洋服化志向および制服化志向の学校間差異に注目して」『日本の教育史学』39集, 1996年, 197頁。
- 11) 鳥取西高百年史編纂委員会編刊『鳥取西高百年史(本編)』1973年, 474~477頁には大正11(1922)年夏服から洋装制服が図示されている。これが, はじめから着用を義務づけられたことを示すのかは定かではない。洋装化が漸次進んでいる一方, 高等女学校裁縫科の教授要目は和裁重視であった。洋裁課題は1903(明治36)年の教授要目に登場し, 1911(明治44)年に一度の改定を経て, 1943(昭和18)年まで維持された。つまり

1903年から43年までの40年間全く変更されることなく、洋裁課題は「しゃつ、ずぼん下」のままであった(教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』5巻, 1939年, 335~337頁。ただし実科高等女学校の教授要目においては, 1911年改訂で子ども服を中心に洋裁課題は増加した)。衣生活環境が洋装化しても, 高女の裁縫科の教授内容は見直されることはなかったのだ。八頭高女や鳥取技芸女学校では, ゆかたの早縫い競争が行われ, わずか2時間でこれを縫い上げなければならなかった。したがって, 和裁に関しては相当の腕前であったと思われる。

12) 同上, 458頁。

「4年生の手製」というのは, 4年生が新入生の制服をミシンで縫製したことを意味する。1931(昭和6)年から始まったこの制度について, 『鳥取西高百年史(資料編)』には以下のように述べられている。

本年度から本校生徒の制服の型を革め, 従来は洋服商人より購入せしものを, 学校にて上級生をして調整せしむることにしました。新型制服調整の役を引き受けた4年生は, 第1学期の間は毎日放課後までも多忙を極め, 新型ミシン25台休む間もなく使用されてゐました。新型制服は価格が低廉で地質, 型, 色合等も上品で堅牢であるので家庭でも好評を博しています(鳥取西高百年史編纂委員会編刊『鳥取西高百年史(資料編)』1973年, 276頁)。

このような事例は県立鳥取高女だけではなく, 全国的にミシンが裁縫教室に備えつけられるようになる1920年代末から30年代に見受けられた。制服着用に伴う保護者の経費負担軽減化とともに, 生徒間の恩愛関係の形成という生徒管理上の効果も期した措置であったという(佐藤秀夫『日本の教育課題2 服装・頭髮と学校』1996年, 東京法令出版, 222頁)。

13) 佐藤秀夫『日本の教育課題2 服装・頭髮と学校』1996年, 東京法令出版, 223~224頁。

14) 板垣邦子『昭和戦前・戦中期の農村生活一雑誌「家の光」にみる』三嶺書房, 1992年, 72頁。

15) 「ナギ続きで鮮魚多く一養鯉家大打撃」『因伯時報』1927年1月7日, 2面。

16) 『日本海新聞』1940年4月3日, 2面。

17) 「兎のとれ高」『因伯時報』1927年1月7日, 2面。

18) 「因幡養兎協会設立」『因伯時報』1930年3月27日, 1面。

19) 1940(昭和15)年の『日本海新聞』では, 県立鳥取高女卒業生の結婚観や気質などについて「制服脱いだ現代娘気質(1)~(5)」と題して報告している。これによると, 同年卒業の247名のうち, 見合い結婚を希望するもの140名, 見合い結婚を希望するが結婚までに数ヶ月あるいは数年の交際をもちたい, などの見合いと恋愛を折衷したものが72名であったのに対し, 恋愛至上主義者は21名と全卒業生の1割足らずであった。また, 理想の夫像は「明朗で真面目で親切で意志の強い, 文化的趣味の豊かな男性」を大多数のものが望んでいた。これには「凡そ現実とはかけ離れた理想の夢」と記者に揶揄されている。さらに「教育程度の高い, 俸給生活者が第一」と「自分よりも教育程度の高い生活に安定のあるサラリーマン」を希望していた(「制服脱いだ現代娘気質(1)~(5)」『日本海新聞』1940年3月14・15・16・17・18日, いずれも3面)。

親や仲人の決める結婚ではあったけれども, 結婚をイエの存続以上に, 個人本位に考えているようすがうかがえる。

20) 吉田正『私のたべもの風土記』山陰政経リポート, 1981年, 9頁。

21) 宮本常一『宮本常一著作集』7巻, 未来社, 1968年, 15頁。

## 参考図書

浅沼喜実『鳥取の食文化』鳥取市教育福祉振興会, 1982年。

北浦かほる・辻野増枝編著『台所空間学事典』彰国社，2002年。

西村清子編著『因幡の料理歳時記』新日本海新聞社，1979年。

西山松之助ほか『たべもの日本史総覧』新人物往来社，1994年。

リビング・デザインセンター編刊『家事—日本人とすまい7』2002年。

## 付記

本論は、平成18年鳥取市総合政策調査委託事業の一部であり、平成19年3月に行われた受託成果発表会に報告した「湖山池周辺の昭和前半の生活・文化等の調査」の内容をもとに加筆修正したものである。本調査にあたっては、調査に参加くださった14名のみならず、湖山地区公民館、末恒地区公民館、湖南地区公民館、松保地区公民館、鳥取大学教育地域科学部卒業生杉本真由実さん、山本裕子さん、鳥取大学地域学部卒業生一水美穂さん、鳥取大学地域学部4年生石田小百合さん、鳥取県立岩美高等学校山口京子先生、湖山池自然再生協議会遠藤浩明さんに多大なご協力をいただきました。また、本稿執筆にあたっては、鳥取大学地域学部山根俊喜教授より貴重な資料を提供していただきました。記して感謝申し上げます。

(2008年6月2日受付，2008年6月4日受理)